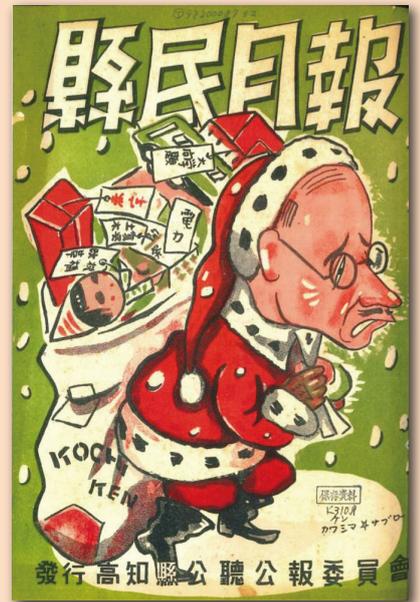
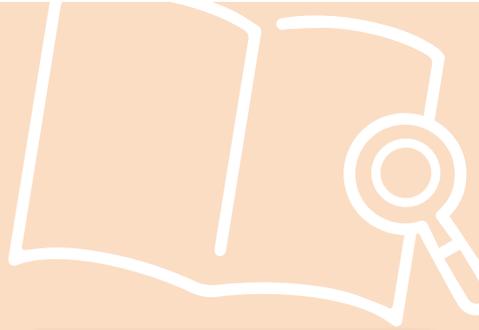
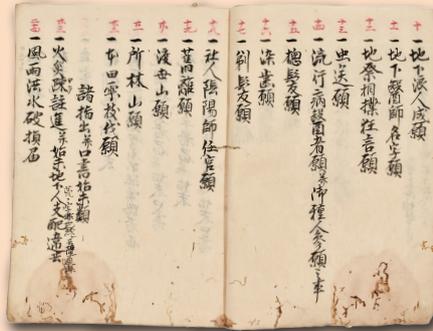
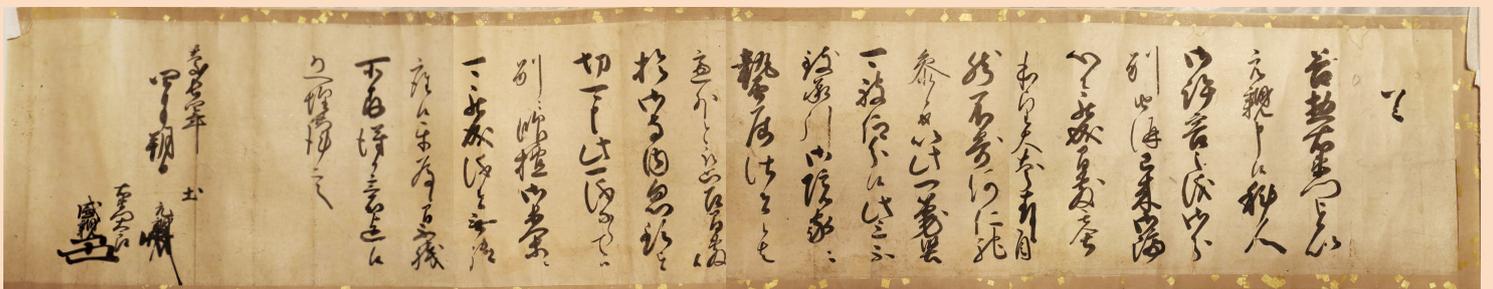
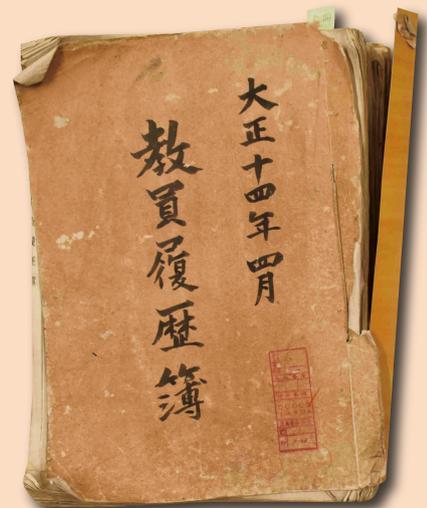
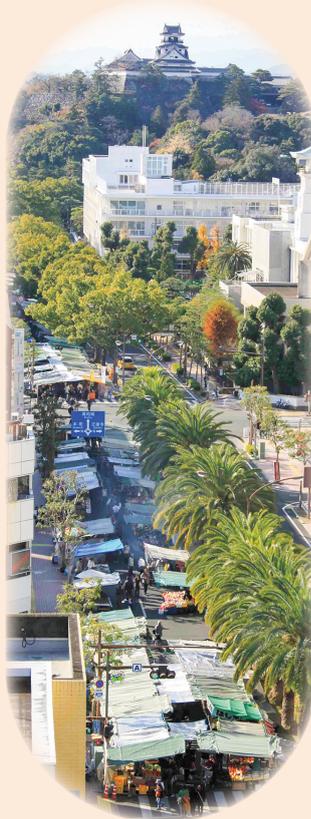


# ときのあかし



## 目次

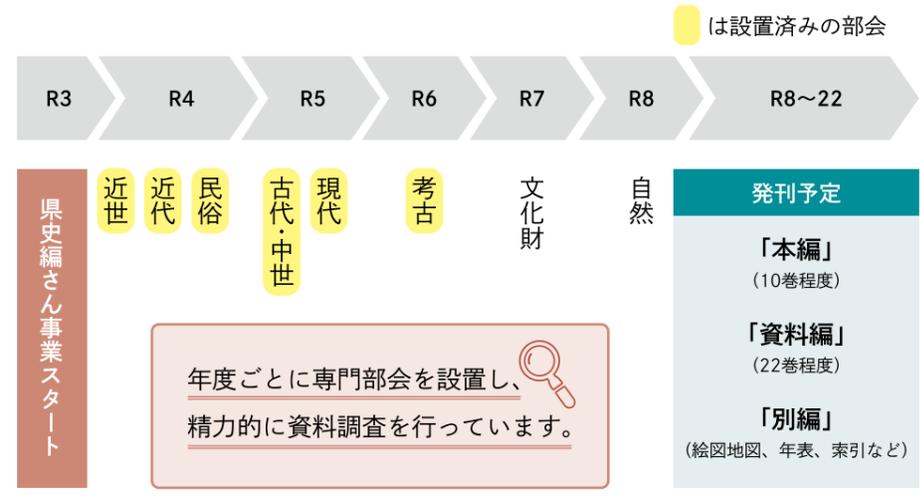
- 1・2 高知県史編さん事業の紹介
- 3・4 古代・中世部会  
「長宗我部元親・盛親連署状」の  
原本と写本から見えるもの
- 5・6 近世部会  
一冊の文書ひな形集から見えてくる、  
村人の生活と村役人の仕事
- 7・8 近代部会  
地域に残る貴重資料の探索
- 9・10 現代部会  
資料としての自治体広報誌
- 11・12 考古部会  
・ 古代土佐国の仏教文化を今に伝える廃寺跡  
・ 縄文時代がはじまった頃の  
雰囲気味わえる洞窟遺跡
- 13・14 民俗部会  
「日曜日」という宝もの



# 高知県史編さん事業の紹介

高知県のあゆみを後世に残すため、令和3年度から県史編さん事業がスタートしています。20年後の令和22年度の完成を目指して、古代・中世、近世、近代、現代、考古、民俗、文化財、自然と8つの分野について調査を行い、新しい『高知県史』として順次刊行していく予定です。

## ● 県史編さんスケジュール (予定)



## ● 高知県史編さんの流れ

### 01 / 資料の所在調査、現地調査

高知県に關係する歴史資料を、県内外で幅広く探し、その所在を確かめます。



### 02 / 資料調査 (撮影・リスト作成・翻刻)

所在などが確認できた資料は、撮影し画像データとして収集・保存した後リスト化し、県史の基礎資料として整理します。また、資料編に掲載するため、古文書については翻刻(※)作業を行います。  
※翻刻(ほんこく): くずし字で書かれた古文書の文字を解読し、現在使われている文字に変換すること。



### 03 / 掲載資料の選別・執筆作業

各部会の委員の皆さんが協議を行い、蓄積された資料データの中から県史に掲載する資料を選別します。また、資料の解説文や本文などは、多くの方々のご協力をいただきながら、執筆していく予定です。



### 04 / 高知県史刊行

令和22年度までに全32巻の刊行を予定しています。前回の高知県史は10巻でしたが、大幅にスケールアップする予定です。



## 歴史資料調査隊の活躍

県史の編さんは、膨大な量の資料の撮影やリスト作成といった、地道な作業を元に進められています。気の遠くなるようなそれらの作業に、日々県史編さん室のスタッフとともに取り組んでいるのが、約40人の県内の大学生を中心とした「歴史資料調査隊」の皆さんです。

彼らは、大学の授業の合間などに、時間単位のシフトを組み、数十万点にもなる古文書の撮影やデータ入力、県内各地で言い伝えられている民話などのデータベース作成、電子化されていない議会資料の撮影など、様々な作業に熱心に取り組んでいます。

さらに、古文書解読の手ほどきを受けながら、史料の翻刻に取り組んでいる学生さん達もいます。初めは歴史に興味があった方も、周りの先輩たちに相談しながらめき上達していきます。

県史編さん事業は、こうした多くの若い人たちの協力もいただきながら、日々進んでおります。



歴史資料調査隊養成講座(史料解読編)の様子



県史編さん室での資料撮影(上下とも)



高知県議会図書室での資料撮影

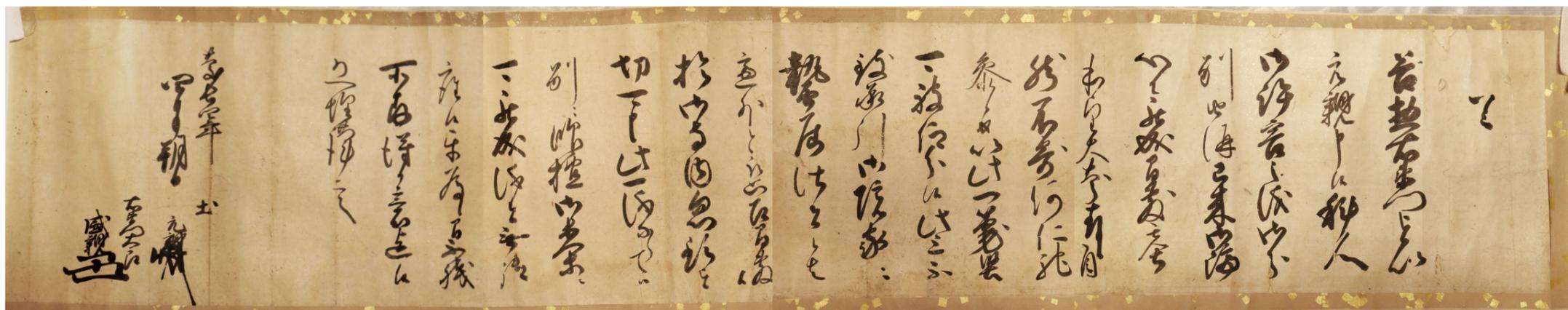
## 発刊によせて



高知県史監修者  
**藤井 譲治**  
(京都大学 名誉教授)

高知県では約50年ぶりとなる、県史編さん事業が始まっています。令和22年度の完成を目標に、様々な時代・分野の歴史を調査し、皆さんに分かりやすい形でお見せできるよう、日々作業を進めています。また、地域に残されてきた古文書をはじめとする貴重な歴史資料を、画像の電子データとして収集・保存し、大規模な災害などで失われるようなことがあっても将来に残し伝えていくことも、この事業の大きな目的の一つと考えています。

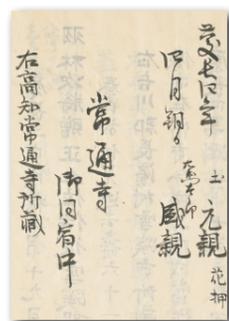
この冊子「ときのあかし」では、県史編さんの各専門部会が行った調査で明らかとなったトピックスを、ひと足先に紹介いたします。ご覧いただいた皆さまに、かつてこの地に暮らしていた人々の「生きた証」を感じていただき、高知の歩んできた歴史に興味・関心を持ち、かつ今を考えていただければと思っています。



①長宗我部元親・盛親連署状(竹林寺所蔵)



②「土佐国蠹簡集」巻七(部分)  
(高知県立高知城歴史博物館所蔵)



③「土佐国蠹簡集」巻七(部分)  
(高知県立図書館所蔵)

## 古代 中世

古代・中世部会が対象とする時代の史料は、原本が確認できず、後の時代に写された写本しか残っていないこともあります。そういった史料については、写本や影写本(原文書から文字を写し取ったもの)に書かれた内容を読み解き、比較しながら、新しい『県史』に収録していくための史料検討を進めています。



東京大学史料編纂所での部会協議



五台山竹林寺 本堂(文殊堂)

### 高知県史 にかける思い

高知の古代・中世といえば長宗我部氏がイメージされますが、今回の県史では、地域に伝わる多くの村落文書にも注目していきたいと考えています。また、江戸時代の土佐藩ではレベルの高い史料集が繰り返し編まれていて、それが現在の歴史研究に大変役立っています。資料編第1巻ではそれらに収められた文書を、地域別・家別に再編成し、新たな知見を加えることで、信頼に足る一冊にまとめてみたいと思います。皆さんの住んでいる地域にどんな文書が残されているのか、より分かりやすくお示しできれば幸いです。



高知県史編さん  
古代・中世部会 部会長  
**井上 聡**  
(東京大学史料編纂所 准教授)

## 「長宗我部元親・盛親連署状」の 原本と写本から見えるもの

### 土佐史研究に欠かせない「蠹簡集」とは？

古代・中世部会の調査が開始し、新たな文書発見の機運が高まっています。併せて、旧『高知県史 古代中世史料編』(以下、『旧県史』)に収録された「土佐国蠹簡集」(以下、「蠹簡集」)に掲載される文書の原本の発見も期待されます。

「蠹簡集」とは、土佐藩士の奥宮正明(享保11・1726年没)が編さんした史料集です。土佐国内の諸神社・諸家に伝来する古文書などが掲載されています。現段階では原本が確認できない文書も多く、土佐史研究に欠かせない史料集といえます。また、「蠹簡集」でしか確認できない情報もあり、原本と比較しながら用いる必要があります。その一例を紹介します。

### 原本で失われた情報を「蠹簡集」で補う

写真①は、近年の調査により、五台山竹林寺(高知市)で発見された「長宗我部元親・盛親連署状」の原本です。宛先は記されていません。ところが、「蠹簡集」(写真②)には「常通寺」という宛先に加え、「常通寺所蔵」と追記されています。常通寺が所蔵する古文書

は一部が竹林寺に移管された可能性があり、おそらく本文書もその一つと推定されます。原文書では失われた情報を「蠹簡集」で補うことができ、写本といえど決してあなごることはできません。

一方、原本で着目すべきは元親の花押です。元親は、慶長4(1599)年5月19日に死去します。「慶長四年四月朔日」という日付を持つ本文書は現在確認できる元親最後の発給文書です。「蠹簡集」では「花押」と記されるのみで型は判然としません。『旧県史』では、高知県立高知城歴史博物館蔵本を底本とし、高知県立図書館蔵本(写真③)を校合に用いています。しかし、どちらも花押は写し取られておらず、原本の発見により、死の直前に元親が用いた正確な花押型が明らかとなりました。

このように、原本と「蠹簡集」の両者がそろって初めて垣間見える事実があります。先述のように、「蠹簡集」には江戸時代の所蔵者が記されています。子孫の方など現在の所蔵者が分かれば、新たな原本を見出せる可能性があります。地域の情報は県民の皆様が一番詳しいことは言うまでもありません。新しい県史の調査に、県民の皆様のを協力をぜひとも仰ぎたいと思います。

古代・中世部会委員

石畑匡基(大手前大学 講師)

里分、山分、浦分、そしてお城下、

それぞれの地域に残された文書の一つ一つが、

江戸時代人の貴重な証言です。

先人たちの声に耳を傾けた時、幕藩体制という

政治と人々の暮らしが、鮮やかに浮かび上がります。

何をするにも「願」から

近世部会の調査は、資料群ごとに、全ての文書を一点ずつ調査カードに採録するという方法をとっています。全てに目を通すことで、思わぬ文書との出会いもあります。

故・関田英里氏（元高知大学学長、経済学者）収集資料の『諸草案控』もその一つで、村人が庄屋や藩へ提出する願書や届のひな形がまとめられています。

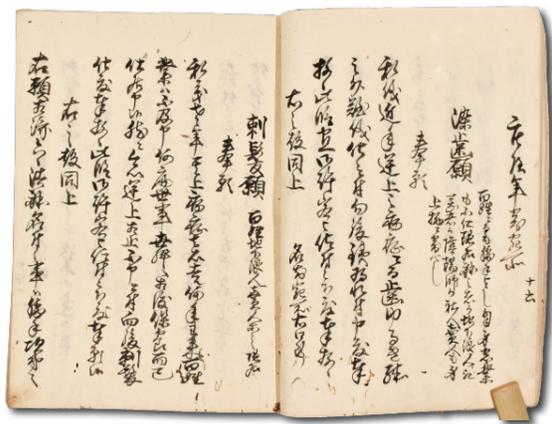


冊子形態の縦帳で、本文は約220頁からなる。



3部構成で、75項目の願や届・差出のひな形が記録される。

高知県内で、ほぼ同内容の冊子が数例確認されており、庄屋たちの間で、広く共有されていたとも考えられます。



染歯(お歯黒)・剃髪(お髷)の許可願。染歯は「逆上」による「歯ゆるぎ」が、剃髪も「逆上」が理由。

例えば、「諸願類」の部では、四国遍路願、入湯願、他国稼年限御願、他国縁組願など、藩外へ出る際の願書から始まり、諸商売願や地下医師名字願、地祭相撲狂言願や虫送願、さらには流行病医

者願、染歯願、総髪願、剃髪願など、生活のわずかな変化の一つ一つに、庄屋や藩の許可を必要としたことがわかります。

「諸指出井口書始末類」の部は、火災疎注進、風雨洪水破損届から始まり、病死辺路届、他国遊芸者届など村外者への

近世部会が扱う史料の中心は、文字で記される「文獻」です。多くは紙に書かれたものですが、木板や石板、時には金属板や瓦などに記されている場合もあります。

村の歴史を考える時、その地域の神社を調査することは必須で、その際、祭礼次第や由来書などの紙資料の他に、寄進者を列記した木板や棟札なども確認します。

ある神社の棟札には、村役人や大工に加えて、その村を知行地として与えられていた土佐藩の家老の名前

Topics

が「大旦那」として記されていました。更に、江戸時代後半の棟札には、「大旦那」として当時の土佐藩10代藩主山内豊策の名が記されています。

村の神社は村人の信仰の対象でありながら、その建立に、年貢を介在して村とつながる城下の侍、更には藩主が関係する意味は何なのか、改めて考えるべき課題だと思えます。



元禄3年(1690)、長岡郡国分村熊野神社の棟札。「大旦那山内彦作」とある。

高知県史 にかける思い

江戸時代は、日本の歴史の中でも比較的安定した260年でした。政治組織も整備され、庶民教育も充実したため、公私ともに膨大な史料が残されています。県内でも未調査の史料が多くあり、近世部会では、旧家や役所などに「群」として残された史料を、1点ごとに調査しています。そのためには多くの調査員が必要で、県内外の大学生・大学院生らが参加しています。県外調査員の感想を聞き、地元では気がつかなかったことを知ることしばしばで、全国から見た土佐史の位置や特色を見つめるよい機会になっています。



近世部会 合同調査の様子

高知県史編さん 近世部会 部会長

渡部 淳

(高知県立高知城歴史博物館 館長)



一冊の文書ひな形集から 見えてくる、村人の生活と 村役人の仕事

警戒を背景とした届が続ぎ、喧嘩届・川流死届・迷子届・長寿届・拾物届・二子三子届など、これまた些細な出来事までが庄屋や藩へ報告されることとがわかります。この記録によって、藩の支配の仕組みだけでなく、村人の生活や事件の具体までを知ることができます。

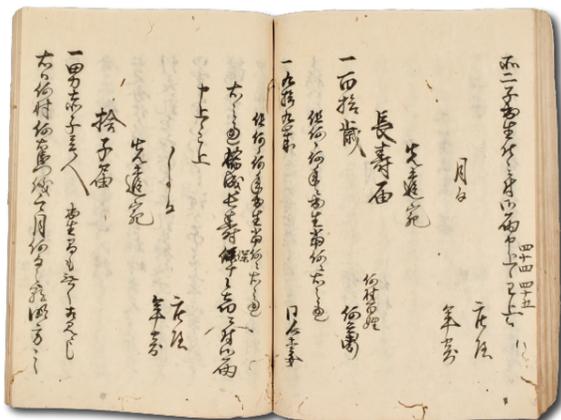
多岐にわたる庄屋の仕事

当時、これらの文書を村人に提出させ、内容によっては藩に取り次ぐのが、村を取り仕切る庄屋の役割の一つでした。かつて、安芸郡北川村のある旧家の文書調査で、庄屋の手元にある公務文書一覧を見たことがありますが、そこには地検帳、宗門帳、普請田役帳はじめ、およそ350件を超える文書が記録されていました。藩と村人との間にあって、多忙な日々を送る庄屋の姿と、習得すべき学力と教養の幅広さに圧倒されたのですが、その中にも「諸願書」(しよがみ)「諸願書始末諸差出」という文書名が確認できます。

ちなみに、この『諸草案控』の最後は、「吟味作法」として、庄屋から村人へ申し渡しを行う場所と地面に敷く筵の有無を、身分に応じて縁側(年寄名本他)・路地筵(郷土家来・百姓他)・土間筵不及(流浪者他)と使い分け、土間では拷問も行われるという、封建社会の厳しさを彷彿とさせる一文で終わっています。

近世部会 部会長

渡部 淳



長寿届。年齢・名・生年が藩に上申され、褒美が下される場合もある。

近代部会では、県内各地をくまなく巡り、地域で大切に  
残されてきた、明治から昭和初期の資料を調べています。  
そんな中、思いもよらない資料の中から、高知出身のある  
女性作家の足跡が見つかりましたので、ご紹介いたします。



整理された「旧池川町役場資料」(仁淀川町池川総合支所の資料保管庫)



仁淀川町池川総合支所での資料調査(2022年9月12日)

### 高知県史 にかける思い

1977(昭和 52)年に完成した旧の高知県史では、政治史  
を中心に近代が語られていますが、経済や文化といった他  
の分野や、中心部以外の地域社会などについての記述が十分  
とはいえませんでした。今回の県史編さんでは、県内各  
地を回り資料調査を行っています。高知の歴史研究を支え  
てきた郷土史家の方々の成果も活用させていただきながら、  
戦禍を免れ大切に残されていた地域の歴史資料を、徹底的  
に調査・研究して、県民の皆さんにその成果を示し、また  
後世に残していきたいと考えています。



高知県史編さん  
近代部会 部会長

羽賀 祥二  
(名古屋大学 名誉教授)

## 地域に残る貴重資料の探索

### 近代部会の資料調査

近代部会では編さん事業が始まっ  
て以来、仁淀川町、安芸市、日高  
村、須崎市、室戸市、四万十市、土  
佐清水市、土佐市などの市役所・町  
村役場を訪れ、保管されている近代  
行政文書(県・市・郡・町村の役所  
文書・議会文書など)を調査し、重  
要な文書を撮影するという作業を、  
地道に続けてきました。  
1945年7月の高知大空襲に  
よって、県庁文書や県議会文書など  
戦前の歴史を明らかにするために必  
要で、貴重な資料群が焼失してしま  
いました。それを補うことができる  
公文書を、県内各地の自治体保管資  
料から探しだし、近代高知県の歴史  
を再構成するための、基盤資料とし  
て整えることに、近代部会の最初の  
目標を置いてきました。  
最初に合同調査に入ったのは、仁  
淀川町池川総合支所でした。ここに  
は「旧池川町役場文書」が収蔵さ  
れ、それは約600点にも及びま  
す。2022年7月22日に予備調査  
を行った上で、9月に部会委員7名  
と編さん室関係者、そして撮影協力  
者の高知大学学生が参加し、支所の  
会議室をお借りして、調査と撮影を  
始めました。これまでに撮影済みの

### 先人の生きた証が残る 貴重資料

この時に資料調査の中では、思いも  
かけない文書に出会いました。「大正  
十四年四月教員履歴簿」という簿冊  
は、1910年代から1945年まで  
の間、池川町内の小学校・国民学校に  
務めていた教員(およそ490名)の  
履歴書を綴じた資料です。ここから当  
時の学校や教員の姿を、具体的に知る  
ことができます。

この名簿の中に、戦前の高知の社会  
とそこに生きる人間模様を描いた、宮  
尾登美子の経歴書がありました。旧姓  
である「岸田登美子」の名で、194  
3年12月10日、池川町安居国民学校の  
助教となり、翌年同町狩山国民学校へ  
移ったことが記されています。

### 新たな高知県史の 編さんに向けて

他方で、調査を続けていく中で、す  
でに廃棄された資料も数多くあること  
もわかってきました。しかし、これか  
ら県内のいろいろな所に出かけて、  
県民の皆さんの協力を得ながら、資料  
を掘り起こしたいと思っています。

近代部会 部会長

羽賀祥二

### Topics

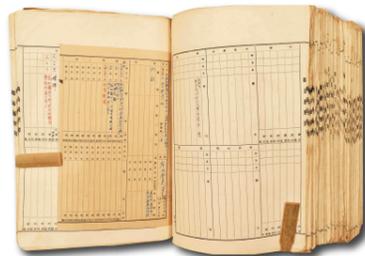
## 浄瑠璃団体 共正会・因会の記念碑



令和6年7月、高知市内にある安楽  
寺(四国八十八箇所巡礼の第30番札所・  
奥の院)の境内で、近代高知の浄瑠璃の  
振興に関係する3基の記念碑と、女性  
の結髪改良に尽力した植田玉造の記念  
碑を見つけました。これらは約50年前  
に発表された複数の文献の中で、安楽  
寺と芸能・風俗との関係を示す資料と  
して紹介されています。しかし、建立  
のいきさつは明らかにされないまま、  
忘れられてしまったようです。  
4基のうち、植田記念碑と浄瑠璃団  
体共正会・因会の活動を讃えた記念碑  
には、郷土史研究の先覚者の寺石正路  
が関係し、碑文を書いていることも注  
目されます。  
四国巡礼の霊場と芸能・風俗・歴史  
との関わりを、これから考えていきたく  
と思います。



『教員履歴簿』  
(岸田登美子の履歴書が綴じられる)



岸田登美子の教員履歴書

行政資料(公文書)の中でも身近に接する機会の多い自治体広報誌。現代部会では、高知県内の自治体が発行した広報誌の調査を通じて、地域のくらしがどのようなものであったのか、当時の各自治体が抱えていた課題や進めていた施策などを明らかにしています。

## 現代部会の調査活動状況



幡多ゼミナール資料館での聞き取り



帰全会(旧県立婦全農場同窓会)への聞き取り



調査後の部会協議

### 文字資料と聞き取り、 両面で現代史調査を

高知の現代の特徴はなにかを捉えるため県内外で調査に取り組んでおり、調査のなかでは、文字資料だけでなく聞き取りでの調査も実施しています。  
戦後の高知で人々がどのようなくらしを営んできたか、県民にとって高知の現代史がどのようなものであったのか、丁寧に記述していきたいと考えています。

## 資料としての自治体広報誌

### 高知県史にかける思い

現代部会では、文献資料の調査だけでなく、現地に赴いてフィールドワークを行って関係者から生の声を聞き取り、文献資料と組み合わせることを調査の核にしています。そうすることで、戦後の高知の姿をよりリアルに受けとめることができるからです。  
現地を訪ねて暮らしのあり方を調査し、政治や経済の様々な事象が人々の暮らしにどのような影響を与えたか、という視点から高知の現代史を語っていきたくと考えています。出来事として歴史を理解するだけでなく、フィールドワークと暮らしの視点から高知の現代の特色を明らかにしたいと思っています。

高知県史編さん  
現代部会 部会長

大門 正克  
(横浜国立大学 名誉教授)



### 行政の民主化を目的に

上右の図版を見てください。サンタクロースが背負った袋は、「赤字」、「復興土木」、「開発」などのタグがついた箱であふれています。疲れ切ったサンタクロースの顔は桃井知事(当時)のようです。これは、高知県公聴公報委員会が一九四八年二月に発行した『県民月報』創刊号の表紙です。

この時代、GHQの指導のもと、行政の民主化を目的に、各地で行政の動静を公開し意見を募る広報誌が作られました。『県民月報』もその一つですが、この表紙絵からは、「県は様々な困難を抱えています」という、県行政から県民へのメッセージも読み取れます。

### 市町村ごとの個性

一九六〇年代になると市町村でも広報誌の発行が相次ぎます。たとえば宿毛市では、一九六一年六月に『広報すくも』が創刊されます。創刊号には、沖の島診療所開所などのニュースと共に、市政への意見を募る呼びかけがあり、次々号には、早速「市民の声」として、市の水道料金徴収についての署名付き批判と、水道課の回答が掲載さ

### 広報誌から見えるもの

現在の自治体広報誌は、レイアウトが洗練される一方で、型が出来上がり行政の主張を表立って出すことは控える傾向にあります。それでも各誌には個性があります。広報誌を読み、発行時の出来事を知ると同時に、その事柄を記載した側の立場や意図を考えます。(ここに、過去を知る資料として自治体広報誌を読む面白さがあるように思います。

現代部会委員 倉敷伸子



『県民月報』創刊号(1948年12月)表紙  
(オーテピア高知図書館所蔵)



『市政だより とさしみず』207号  
ジョン万次郎漂流150年特集号(1991年2月)表紙  
(オーテピア高知図書館所蔵)

# 考古

高知県内の遺跡とそこから出土する生活道具には、地域や風土の違いによって個性があります。それらは日本全体の歴史の中でどのような価値を持つのか、縄文時代と古代の遺跡の2例をご紹介します。

## 高知県史にける思い

土佐の古代は興味深く、眠ったままの資料や多くの謎が残されています。平安時代に紀貫之が国司として赴任した土佐国府は、南国市にあったとされていますが、場所はわかっていません。県内各地の遺跡や出土した土器や瓦などの考古資料を検討しながら、古代土佐国の姿を少しずつ明らかにしたいと思います。



野中廃寺からの出土品。左2つが軒丸瓦（のきまるがわら）、右が軒平瓦（のきひらがわら）です。



高知県史編さん  
考古部会 委員

大橋 泰夫  
(鳥根大学 教授)

## 古代土佐国の仏教文化を 今に伝える廃寺跡

### 南国市野中廃寺の調査

古代では政府は仏教の普及を奨励し、飛鳥時代の7世紀後半には都で川原寺・大官大寺などの官大寺が建立され、全国各地でも寺院が建てられました。まず、地方では仏教は郡役人などの豪族によって受容されました。

土佐国では古代寺院は多くありましたが、7世紀後半から豪族らによって氏寺として秦泉寺廃寺(高知市)、比江廃寺(南国市)などが建立されました。奈良時代の8世紀中頃には国立寺院の



野中廃寺全体写真

土佐国分寺が造営されました。寺院には本尊仏を安置する金堂や塔、僧尼の講説の場である講堂などが建てられました。金堂が東、塔を西に配置した法隆寺式、金堂と塔の位置を逆にした法起寺式の伽藍配置が地方では多く採用されました。土佐国の寺院の多くは伽藍配置が不明ですが、野中廃寺は法起寺式の伽藍配置を採用し、寺の運営施設まで明らかになった唯一の寺院です。

野中廃寺が建てられた年代は、これまで不明でしたが、県史編さん事業に関わる瓦や土器の調査を南国市教育委員会と行い、国分寺創建と同じ頃、奈良時代中頃(8世紀中葉)に創建され、平安時代初めの9世紀代まで存続していたことが明らかになりました。

野中廃寺は国府や国分寺が置かれた長岡郡にあたります。最近、近くで調査された若宮ノ東遺跡は、土佐国でもっとも古い役所で7世紀後半に設置されたことが明らかになっています。野中廃寺は土佐国の古代や仏教文化の展開を考えるうえで重要であり、県史でも詳しく取り上げる予定です。将来的には史跡として保存され活用が図れることを願っています。

## 縄文時代がはじまった頃の 雰囲気味が味わえる洞窟遺跡

### 佐川町不動ガ岩屋洞窟

1949年、群馬県の岩宿遺跡において、それまで日本にはないと考えられていた旧石器時代の遺跡が初めてみつかりました。すると、旧石器時代から縄文時代へはどのように移行変わったのか。つまり、旧石器時代はどのように終わり、縄文土器はどのようにして出現したのか。当時の日本の考古学界では、とても大きな研究テーマの一つになりました。

そんななか1950年代後半から、この問題の鍵を握るのは洞窟遺跡の最下層ではないかと考えられるようになります。そこで日本考古学協会は1962~1964年、当時知られていた全国約300の洞窟遺跡のなかから、北は北海道から南は鹿児島県まで24の洞窟遺跡を厳選して発掘調査をおこな

いました。四国では、佐川町の不動ガ岩屋洞窟と愛媛県久万高原町(旧美川村)の上黒岩岩陰遺跡がその対象になります。発掘調査の結果、不動ガ岩屋洞窟ではその最下層からまさに縄文時代がはじまった頃(約1万5000年前)の土器と石器が出土。一躍全国的に有名になり、1978(昭和53)年には国の史跡に指定されました。

この洞窟は、一級河川仁淀川の支流である柳瀬川上流の右岸、標高250m

の山の中腹にあります。駐車場から徒歩5分。森のなかの整備された歩道を進むと、南向きに開口した洞窟が現れます。ここには現代的な構造物や車の音はまったくありません。したがって、視覚的にも聴覚的にも、縄文時代がはじまったころの雰囲気を味わうことができます。縄文人と同じ感覚で向き合える遺跡は、全国的にも少なくとも貴重です。



不動ガ岩屋洞窟の内部

不動ガ岩屋洞窟の外観

## 高知県史にける思い

自治体史は、できるだけ地元の人に関わるべきと考えます。しかし今回は、全国的な視点で高知の姿を捉えてほしいとお声かけいただき、参加しました。旧石器時代から縄文時代のこれまでにない高知の姿を、解明するお手伝いができれば幸いです。

高知は国指定史跡が一番少ない県ですが、往事の人々の暮らしを彷彿とさせる遺跡は、県内に数多く存在しています。今まで見落とされていたであろうそれらの価値を浮かび上がらせる、この事業は良い機会になると考えています。



狩りの道具と考えられる、洞窟から出土した有石尖頭器(ゆうせつせんとうぎ)。

高知県史編さん  
考古部会 委員

水ノ江 和同  
(同志社大学 教授)

観光名所としても知られる、お馴染みの日曜市。民俗部会ではこうした「市」も、生活の歴史を語るうえで重要な要素の一つとして調査しています。日曜市の持つ高知ならではの魅力について、ご紹介します。



荷札と値札が並ぶ日曜市の店先(2014.11.2) ※日曜市の写真は2点とも筆者提供



追手筋を埋める日曜市のテント(2011.12.18)

## 中土佐町矢井賀「漁業絵馬」



中土佐町矢井賀・大神宮に奉納されているカツオー本釣り漁絵馬

### 当時の漁の様子が描かれた絵馬

中土佐町矢井賀地区の神社やお堂には、明治期から昭和期にかけて地域の漁師によって奉納された絵馬が残されています。当時、漁師たちは大漁があったことの記念と大漁祈願のため、芝居の場面や漁の風景を描いた絵馬を納めました。そこには、かつてのカツオ漁やブリ漁の様子を見ることができま

### あこがれの市で感じた驚き

学生時代から市に興味をもち、長らくあこがれた「土佐の日曜日」にようやく足を運んだのは、2005年1月のこと。まず驚いたのは店数の多さです。追手筋にびっしりと並ぶテントに圧倒されただけでなく、他の曜日にも市内の各所で市が開かれ、それらを管轄する専門の「街路市係」まであると聞いて、なお驚きました。

市といえば、祭りの縁日のような喧騒を思い浮かべます。ところが日曜日では、ざわめきや足音は絶えず耳に入ってくるものの、無理に呼び止められたり、品物を勧められたりすることはありません。荷台の品物には、どれも手書きの値札が添えられています。のどかで礼儀正しい雰囲気は、ここで感じたもうひとつの驚きでした。

### 日曜市に受け継がれるもの

後日、日曜市の歴史を詳しく調べようになつて、その理由がわかりました。日曜市の管理を市役所が担うようになったのは昭和6年。それ以前は、開催場所の町の総代や有志者がその役にありました。当時の開

## 高知県史にける思い

各地に伝承されているお祭りや年中行事、地域で暮らすための生業(なりわい)などさまざまな事柄について、その背後にある意味やそこに込められた思い、時代の移り変わりによる変遷の姿、培われた知識・技術などを明らかにしていくことが、民俗部会の目標です。高知は豊かな自然に恵まれ、多様な生活文化が育まれてきました。文字資料には現れなくても、今も地域に根ざしている生活の歴史を、生き生きと描きたいと考えています。



高知県史編さん  
民俗部会 部会長

常光 徹  
(国立歴史民俗博物館 名誉教授)

## 「日曜日」という宝もの

催場所は帯屋町で、組合組織や出店の手続きといったものもとくになく、場所さえあいていれば、住民に一声かけるだけで自由に商売に参加できたようです。その一方で独自の内規のようなものもあり、道路使用時間を日の出から日没1時間前とすること、終わったら掃除をすること、販売品は正札とし、値札をつけること、などがあります。いずれも、今なお受け継がれる不文律のルールです。

もとをたどれば、藩政期の「元禄大定目」(1690年)に記された六斎市にさかのぼるほどの歴史があり、明治の初め、いち早く新曆に対応して人が集まりやすい休日を開催日とした日曜日。市内の大通りの片側を、毎週日曜日の日中、約1キロにわたって歩行者に明け渡し、およそ300店もが軒を連ねる露店の市場など、日本ではここ以外にありません。しかもそこに集まる人たちは、いつからか暗黙の了解となつた平和な約束ごとを、誰に言われるでもなく守り続けているのです。

あまりに身近にあると、その価値には気づきにくいものです。日曜市は、高知が誇る宝もの。この、生きて命ある宝ものが永く保たれることを、心から願っています。

民俗部会委員

山本志乃(神奈川大学教授)

● 発行

高知県文化生活部歴史文化財課 県史編さん室  
〒780-0870  
高知市本町4丁目1-35 高知県自治会館4階  
tel 088-821-7950 fax 088-821-7953  
e-mail 142001@ken.pref.kochi.lg.jp

● 印刷

株式会社クリケット

● 発行日

令和7年3月20日

ホームページ、facebookでも、  
高知県史の調査活動の様子を  
発信しています！



高知県史編さん室  
facebook



高知県史  
ホームページ

本誌「ときのあかし」へのご意見をお寄せください！  
高知県電子申請サービスから、利用者登録せずに利用できます。

アンケートは  
こちらから

